

久高島のイザイホーの母胎

畠山 篤

一 はじめに

本論のねらい 沖縄県久高島では旧暦一月にフバワク（イザイホー小とも）が執り行われる。

本論は、まず、この(3)現行のフバワク（イザイホー小とも）の次第（儀礼）とそこでうたわれる神歌（テイルル）を記述し、その祭祀世界が次の諸要素・主題を持つことを明らかにする。すなわち、(a) 嶽廻り（御嶽巡拝）をして御嶽の蒲葵などを掃除し、蒲葵の葉を重用し、(b) ニライカナイの神々が船に乗って来訪し、(c) 年末に一年間の祈願の結び（立て御願が叶えられたという感謝「御願解き」）をし、(d) 首里王府の神の島の一般神女組織を再編し、(e) 神歌が首里王府を志向し、(f) スクの大漁祈願をしている。

次いで、(3)現行のフバワク（イザイホー小）以前に(2)「かつてのフバワク」があり、それが右の諸要素・主題の他に、(d)にさらに首里王府の最高神女・聞得大君に仕えるナンチュの成巫式（イザイホーの前身）もあったことを述べる。そして、この(2)「かつてのフバワク」を母胎・祖型にして、(4)イザイホーと(3)現行のフバワク（イザイホー小）が誕生したことを明らかにする。

理解する便宜上、祭祀名に(2)〜(4)の番号を付し、祭りの要素・主題に(a)〜(f)の符号を付した。なお、(1)がないのは、(2)「かつての

フバワク」以前にさらに(1)「はじめのフバワク」があった、と想定しているからである。

右の祭りの形成過程の仮説を図化すると、次のようになる（図1）。

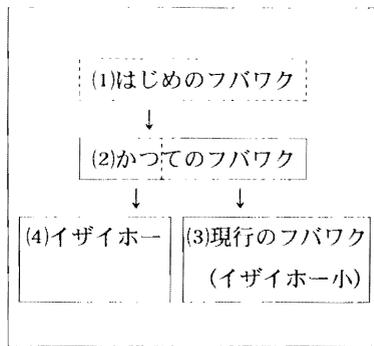


図1 イザイホーの形成過程

二 現行のフバワクの次第の一覧

現行のフバワクの次第の一覧 一九八三年（昭和五八）の(3)現行のフバワク（イザイホー小）を報告した比嘉康雄（一九九三a、四五〜四七〇頁）と、この前後の筆者の調査をもとにして、(3)現行のフバワク（イザイホー小）の次第をまとめると、次の一覧表になる（表1）。

表1 現行のフバワク(イザイホー小)の次第の一覧表

一 目 目													月 日							
午 前												早 朝	時							
アグル嶽	神屋原森	道中	道中	道中	外間殿	道中	道中	スベ一嶽	〈神女たち〉	蒲葵御嶽	(上道)	(下道)	スベ一嶽	〈掃除役〉	両ノ口殿内	〔三殿内〕	外間ノ口殿内	場 所	次 第	神 歌
船漕ぎ儀礼	祈願	アグル嶽の遥拝	百名の遥拝	ウブンデイ山の遥拝	祈願	徳仁井を遥拝	小島の竜宮神を遥拝	祈願		掃除	掃除	掃除	掃除		神女の集合	〔掃除役の交替式(一)〕	量り前・拝み神酒			
フバワクのティルル																				

		二日目															
昼		朝				早朝				午後							
御殿庭	蒲葵御嶽	ウブンデイ山	クンブチ山	カンジャナ山	(神女たち)	御殿庭	ウブンデイ山	大里家の裏	外間山	中外間の裏	(掃除役)	外間山・大里家裏	弟ソールイの家	各戸	外間殿	中の御嶽	蒲葵御嶽
スクの大漁祈願	祈願	船漕ぎ儀礼	船漕ぎ儀礼	船漕ぎ儀礼		樽真神酒量り・拌み御酒		蒲葵の葉の採取				蒲葵の葉の採取	神饌の調理	祭料の徴収	カチャーシー	祈願	退役
		フバワクのテイルル	フバワクのテイルル	フバワクのテイルル													[掃除役の交替式のテイルル]

〔掃除役の交替式(一)(二)(三)〕は、子・卯・午・酉の歳に執り行う。

一日目の午前の次第、一日目の船漕ぎ儀礼、フバワクのテイルル
 なお、一日目の午前の次第、一日目の船漕ぎ儀礼、フバワクのテイルルについては、畠山篤(二〇〇五a)に述べたので、参照されたい。

三 掃除役の交替式(二)

掃除役の交替式(二) 掃除役の交替する年(子・卯・午・酉の歳)には、朝の(d)掃除役の交替式(一)に引き続き蒲葵御嶽でも改めて(d)掃除役の交替式(二)を執り行う。

早朝に用意された神酒(神饌)を神前に供え、外間ノロの司祭のもとでイビの前に新旧の掃除役が整列し、祈願する。それから、神女たち全員が「掃除役の交替式のテイルル」をうたう。うたい終わると、神女たちに神酒(神饌)が下される。その接待は新掃除役がし、旧掃除役はこの時から兄ヤジク(シユリユリ達)に昇任して神女たちの末席に座り、接待される。

この儀礼の前のヤグル嶽における船漕ぎ儀礼で既に(b)ニライカナイの神々を迎えているので、ニライカナイの神々がこの掃除役の交替式(二)に臨席していることになる。

この儀礼をもって(d)新掃除役はこれから三年間、聖地の掃除や祭りの雑用に就くことになり、旧掃除役は兄ヤジクに昇任する。

シユリユリ達の名義 掃除役を終えた者を別にシユリユリ達とかシユリユリーとかいう。シユリとは蒲葵の葉の櫛をかけた「袖」のことであり、同時に櫛がけをして年中行事の下働きをすることも意味している。そして、ユリはその袖を「緩める」、取る義で、下働きを終えることである。このようにして掃除役(弟ヤジク)がシユリユリ達・シユリユリーに昇任することを、「シユリユリテイ、ヤジクニナル(袖

が緩んで、兄ヤジクになる)」といっている。

四 掃除役の交替式のテイルル

掃除役の交替式のテイルル 次に、この「掃除役の交替式のテイルル」を上げる。この神歌の曲は「イザイホーの元テイルル」と同じである。この本文と共通語訳は、筆者が神女の西銘シズ刀白から聞いたものである。

- 一 タキガマエ ウサガテイ 嶽が前(神饌)を 載いて
- 二 イビガマエ ウサガテイ イビが前(神饌)を 載いて
- 三 ノロヤジク ナイピタン ノロのヤジクに なりました
- 四 チミナンチュ ナイピタン 聞得大君のナンチュに なりました

この神歌は、ニライカナイの神々と神酒を共食することによって、(d)掃除役が「ノロヤジク」、すなわちノロに仕えるヤジクになったとい、ナンチュが「君ナンチュ」、すなわち聞得大君に仕えるナンチュになったといっている。すなわち、掃除役(弟ヤジク)はノロの強い管轄のもとで本格的に祭りの下働きに従事するので、掃除役をノロヤジクだといっている。また、ナンチュは聞得大君に奉仕する神女だといっている。

ヤジクへの昇任式 神歌の三の「ノロヤジク ナイピタン(ノロのヤジクに なりました)」という表現は、(3)現行のフバワク(イザイホー小)でナンチュがイビの前の神酒(神饌)を戴くことで掃除役、すなわち弟ヤジクに昇任する儀礼と対応している。このように、掃除役の交替式はナンチュの弟ヤジクへの昇任式でもある。

「かつてのフバワク」でのナンチュの成巫式 これに対して、四の「チミナンチュナイピタン(聞得大君のナンチュになりました)」という表現は、王府瓦解以後の(3)現行のフバワク(イザイホー小)では

ナンチュが不在なので対応する儀礼がない。そこで前述したように、王府瓦解以前の(3)現行のフバワク(イザイホー小)を想定してみると、ナンチュが聞得大君に従って参列しているので、この詞章と対応しているようにみえる。

しかし、王府瓦解以前の(3)現行のフバワク(イザイホー小)であっても、イビの前の神酒(神饌)を戴くことでナンチュになる、すなわち神女になるという儀礼は、想定できない。なぜならば、ナンチュになる儀礼は、王府の瓦解以前、以後を問わず(3)現行のフバワク(イザイホー小)にはなく、(4)イザイホーだからである。したがって、「君ナンチュ(聞得大君のナンチュ)になりました」という表現は、(4)イザイホーと対応しているといわざるをえない。

この齟齬はどのように理解するべきだろうか。これはかつての儀礼のあり様が神歌に痕跡として残ったものと考えられる。すなわち、(3)現行のフバワク(イザイホー小)以前に(2)「かつてのフバワク」があり、その掃除役の交替式において(d)ナンチュの弟ヤジクへの昇任式と(d)聞得大君に仕えるナンチュの成巫式(イザイホーの前身)を同時に執り行っていた、と考えられる。そして、この神歌は、卯・午・酉の歳にうたわれているので、これら三歳刻みの年に三年前の(2)「かつてのフバワク」で成巫式を上げたナンチュが弟ヤジク(掃除役)に昇任し、新たにナンチュが成巫式を上げた、と想定される。

君ナンチュの名義 では、なぜナンチュを「君ナンチュ(聞得大君のナンチュ)」と称するのだろうか。それは、(e)ナンチュが文字どおり聞得大君にだけ奉仕するために設けられた神女だったからではないだろうか。

現行の年中行事でナンチュが参列する祭りは、一月のピーマッティ(火祭りのお願立て)と二二月のピーマッティ(火祭りの感謝祭)、ならびに八月のヨーカー日(女性の祝い)だけである。この三つの祭り

は、島の女性が関与しなければならぬ基本的なものである。すなわち、二つのピーマッティ(火祭り)は毎日の食事に欠かせない火を管理する女たちの祭りであり、ヨーカー日は女性の祝いである。この三つの祭りは神女だから参列するというよりは、一人前の女性だから参列するという性格が強い。そのため、この三つの祭りでは着る女性たちの衣裳は、いつもの白い神衣裳ではなく、紺地である。

このようなナンチュに対して、ヤジク(弟ヤジク・兄ヤジク)、ウンスク、タムトウはタマガエーと総称され、両ノ口に従って各種の年中行事に白い神衣裳を着て幅広く参列している。

このように、現行のナンチュはシマ共同体の祭りにおいて神女として本格的に立ち働く前の予備的な位置に甘んじている。すなわち、王府瓦解以後にはナンチュにほとんど役割がないので、その存在意義がどこにあるかわからなくなっている。

しかし、王府が瓦解する以前には国王(あるいはその代理人)、聞得大君、その他の高級神女が定期的に久高島を訪れ、祭りに参列している。また、聞得大君の成巫式・御新下りでは外間ノ口以下の久高島の神女が渡海して対岸の祭場・齋場御嶽(ウツアツツ)に行き、聞得大君に神名を授けている。このような王府関連の祭りの時にタマガエーたちはもとよりナンチュたちも召集され、一般神女として聞得大君に奉仕した、と考えられる。すなわち、王府瓦解以前には聞得大君に奉仕する神女として、タマガエーのみならずナンチュがとくに必要であった。このように、ナンチュは正に聞得大君に奉仕するためにだけ設けられた神役だ、と考えられる。それで、(e)ナンチュを「君(聞得大君)ナンチュ」と称したのではなからうか。

したがってこれを言い換えれば、「君ナンチュ」がいる儀礼には決まって聞得大君が参列していることになる。

そうだとすると、午歳のナンチュの成巫式である(4)イザイホーに聞

得大君が参列し、また子・卯・午・酉の歳の(3)現行のフバワク(イザイホー小)と(2)「かつてのフバワク」で「君ナンチュ」になりました」と神歌をうたっている。これらの儀礼にも聞得大君が参列していた、と想定できる。そしてさらに前述したように、毎年の(3)現行のフバワク(イザイホー小)でうたう「フバワクのテイルル」Bにノロが「ナンチュピイチ(ナンチュを引き連れ)」という一節があるので、王府瓦解以前には毎年の(3)現行のフバワク(イザイホー小)にも聞得大君が参列していた、と想定できる。結局、聞得大君は午歳の(4)イザイホーはもとより、毎年の(3)現行のフバワク(イザイホー小)、そして子・卯・午・酉の歳(あるいは毎年)の(2)「かつてのフバワク」に参列していた、と想定できる。

ただし、卯歳の(3)現行のフバワク(イザイホー小)で最後の五名のナンチュが掃除役(弟ヤジク)に昇任するので、それ以後の三年間(辰・巳・午の歳)はナンチュが不在になる(後述)。したがって、この三年間だけは「君ナンチュ」が不在な儀礼であっても聞得大君が参列することになる。

イザイホー小の由来 このように、「掃除役の交替式のテイルル」は、(2)「かつてのフバワク」でナンチュの成巫式(イザイホーの前身)をも併せて執り行っていた痕跡を残している。(3)現行のフバワクを「イザイホー小」とも称するのは、このように(3)現行のフバワクと(4)イザイホーの母胎・祖型である(2)「かつてのフバワク」でナンチュの成巫式(イザイホーの前身)をも執り行っていたからではなからうか。

「かつてのフバワク」における王府の神の島の一般神女組織の再編すなわち、子・卯・午・酉の歳に執り行われた(2)「かつてのフバワク」は、(b)ニライカナイから神々を迎え、(d)ナンチュを聞得大君に仕える神女として認定し、既に三年前にナンチュになった者を弟

ヤジク(掃除役)として昇任させ、弟ヤジク(掃除役)を兄ヤジク(シユリユリ達)として昇任させ、そして子・卯・午・酉の歳にかぎらず毎年、七〇歳になったタムトウを引退させるといふ、王府の神の島の一般神女組織の再編をねらった儀礼だった、と想定できる。

イザイホーと現行のフバワクの分離 そしてその後に、王府の宗教政策の拡充に呼応し、この(2)「かつてのフバワク」を母胎・祖型にしてナンチュの成巫式(イザイホーの前身)だけを二二年に一度(午歳)、執り行う(4)イザイホーとして分離・独立させ、荘厳化した、と考えられる。こうして、ナンチュの人員を四倍(五名×四＝二〇名)にして王府の神の島の一般神女組織を拡大した、と考えられる。ただし、三年毎にナンチュの五名が掃除役として昇任するので、イザイホーを執り行った午歳以後の三年間(未・申・酉の歳)のナンチュは一五名、酉歳以後の三年間(戌・亥・子の歳)のナンチュは一〇名、子歳以後の三年間(丑・寅・卯の歳)のナンチュは五名、卯歳以後の三年間(辰・巳・午の歳)のナンチュは不在になる。

この時、ナンチュの成巫式に関わる神歌も(4)イザイホーの神歌として分離し、荘厳化した、と考えられる。

そして、ナンチュの成巫式(イザイホーの前身)を除いた(2)「かつてのフバワク」がそのまま(3)現行のフバワク(イザイホー小)として温存された、と考えられる。そしてこの時、かつてのナンチュの成巫式(イザイホーの前身)に関わる「掃除役の交替式のテイルル」の一節(四)が、(3)現行のフバワク(イザイホー小)に残ったものと考えられる。

曲の一致 こうしてみると、この「掃除役の交替式のテイルル」の曲が「イザイホーの元テイルル」と一致することも、(2)「かつてのフバワク」でうたわれていた神歌が(4)イザイホーと(3)現行のフバワク(イザイホー小)に分離したことを示しているのかもしれない。

神歌の一節(四)が温存された事情 では、なぜナンチュの成巫式(イザイホーの前身)に関わる「掃除役の交替式のテイルル」の一節(四)が、子・卯・午・酉の歳の(3)現行のフバワク(イザイホー小)に痕跡として温存されたのであろうか。それは王府瓦解以前の子・卯・午・酉の歳の(3)現行のフバワク(イザイホー小)にナンチュが聞得大君に従って参列し、神前の神酒(神饌)を戴いたからであろう。すなわち、ナンチュは神前の神酒を戴き、改めてナンチュであることを再認定されたとは拡大解釈されたのではなからうか。

これと類似した事情がこの神歌の一節(三)にもある。すなわち、この一節(三)はナンチュがイビの前の神酒(神饌)を戴くことで弟ヤジク(掃除役)に昇任する儀礼と対応しているものの、既に三年前あるいは六年前に弟ヤジクに昇任した神女も神前の神酒を戴いているので、彼女たちも改めてヤジクであることを再認定された、と考えられる。

このような神女の再認定は(4)イザイホーにおいても見られる。すなわち、(4)イザイホーの三日目のスジ付けと朱付けにおいて一二年前に一度ナンチュと認定された神女(ヤジク)が、次の(4)イザイホーでも同じ儀礼で神女として再認定されている。

神歌は古式を尊重して容易に変えがたいものなので、この再認定の考え方によって拡大解釈し、子・卯・午・酉の歳の(2)「かつてのフバワク」の神歌を温存し、転用した、と考えられる。

王府の神の島の神女 こうしてみると、(4)イザイホーの神歌にはナンチュが聞得大君に仕える神女だと明言する用例がとくになかったのに対して、(3)現行のフバワク(イザイホー小)の神歌(掃除役の交替式のテイルル)の方に(e)「君ナンチュ(聞得大君に仕えるナンチュ)」の用例が残ったことになる。

以上、(2)「かつてのフバワク」のなかにイザイホーの前身があり、

この(2)「かつてのフバワク」にも(3)現行のフバワク(イザイホー小)にも、王府の神の島の神女だという意識がある、と認められる。

こうしてみると、(2)「かつてのフバワク」で三年刻みで君ナンチュが認定され、その後三年×四＝十二年に一度(午歳)、(4)イザイホーでナンチュが認定され、また(3)現行のフバワク(イザイホー小)で三年刻みで掃除役が交替するのも聞得大君に仕えるためのものであったとわかる。すなわち、このように王府の神の島の神女の仕事が三年刻みになっており、「王府の三分制」とおりになっているのも、よく理解できることである。

五 退役

退役 掃除役の交替する子・卯・午・酉の歳以外は、アグル嶽アグルノサカでの船漕ぎ儀礼に次いで、蒲葵御嶽アヲノサカで退役を執り行う。

テーヤクは「定役」の訛りとも考えられる。しかし湧上元雄氏は、「退」すなわちタイが訛るとテーになり、「定」すなわちテイが訛るとティーになるので、テーヤクには「退役」を当てるのが正しい、と教示してくれた。

退役とは、(d)一般神女組織の最高位であるタムトウが七〇歳になると引退する儀礼である。神女たちは、既に用意されてある(a)蒲葵の葉の神座(シキダムトウ)に座る。(b)ニライカナイの神々の臨席のもとでイビに引退の報告をし、直ちに祝いの宴を催す。

(4)イザイホーでナンチュになってからこの(3)現行のフバワク(イザイホー小)の退役までが一般神女の奉仕期間であり、二八年から四〇年の長きに渡っている。この儀礼には、神役を務めあげた慶びと引退の寂しさが漂っている。

六 王府の神の島の一般神女組織の再編

島の一般神女組織の再編 以上のように一見すると、(3)現行のフバワク(イザイホー小)では、シマ(村落共同体)レベルの一般神女組織の再編、すなわちナンチュの掃除役(弟ヤジク)への昇任、掃除役(弟ヤジク)の兄ヤジク(シユリユリ達)への昇任、タムトウの引退の儀礼が執り行われているように見える。

王府の神の島の一般神女組織の再編 しかし、(3)現行のフバワク(イザイホー小)における「掃除役の交替式のティルル」の(e)「聞得大君に奉仕するナンチュになりました」という一節から、(2)「かつてのフバワク」が首里王府の最高神女・聞得大君に仕えるナンチュの成巫式(イザイホーの前身)をも三年刻みで併せて執り行っていたと想定できた。そして、その後ナンチュの成巫式だけを三年×四〇一二年に一度(年歳)、執り行う(4)イザイホーとして独立させ、聞得大君に奉仕するナンチュを増員した、と考えられた。

こうしてみると、久高島の一般神女組織は(d)王府の神の島の一般神女組織であり、(2)「かつてのフバワク」も、これを母胎・祖型にして生まれた(4)イザイホーと(3)現行のフバワク(イザイホー小)も、この(d)王府の神の島の一般神女組織の再編を図る祭りであったとわかる。

七 一日目の午後次第

祭料の徴収 午後、漁の男神人・ソールイガナシー(二名)が、ンナグナー(一四歳の少年)二人を供にして祭料(野菜と現金少々)を左廻り(時計廻り)して各戸から集める。野菜は二日目にスクガラスとともに神女たちに捧げ、現金でその宴に供する魚(塩サバ)を買つ

ている。外間側のソールイは外間側の各戸を廻り、久高側のソールイは久高側の各戸を廻る。

ソールイが二日目の祭料を徴収するのは、漁労に関わることを職掌にする男神人・ソールイにとつて、二日目の(f)スクの大漁祈願が課題であり、この課題のために祈願をしてくれる神女たちに供物を出さなければならなかったからである。また、全戸から祭料を徴収するのは、島の男たちの主たる生業が海上にあつたからである。

神饌の調理 野菜は、両ソールイの妻が徳仁港の潮水で洗う。買った魚(塩サバ)は弟ソールイの家で兄ソールイ夫妻の立ち会いのもとに弟ソールイが切る。

蒲葵の葉の採取 また、ソールイの妻たちが外間山、大里家裏から(a)蒲葵の葉を採取する。この蒲葵の葉は、二日目の樽真神酒の桶の蓋と神女たちの座る神座(シキダムトウ)になる。

八 二日目の準備

蒲葵の葉の採取 二日目の早朝、掃除役は外間側に集合し、それからこの日の祭場(カンジャンナ山・クンブチ山・ウブンデイ山・御殿庭)で使う(a)蒲葵の葉を中外間(屋号)の裏、外間山、大里家の裏、ウブンデイ山で刈り取って各祭場に置く。この(a)蒲葵の葉は、この後に続く儀礼において(b)ニライカナイへの戻り船に見立てられ、神座(シキダムトウ)にもなる。

樽真神酒量り 同じく早朝、御殿庭でソールイによる樽真神酒量りが行われる。神酒は一日目の神酒の徴収と同じく、メインシム組を除く各組を通じて全戸から集められる。

拝み神酒 この神酒のなから三殿内に神酒が届けられる。これを拝み神酒という。

その他の神酒は、午後の宴に供えられる。

九 二日目の船漕ぎ儀礼

カンジャナ山での船漕ぎ儀礼 二日目の朝、弟ヤジク（掃除役）を除くタマガエー、すなわちタムトウ・ウンサク・兄ヤジクが両ノ口殿内に集合し、それから両ノ口とともにまずカンジャナ山へ行く。この祭場では外間根人（不在の時は久高根人）が正装して待ち受けており、(a) 蒲葵の葉をノ口以下の神女たちに手渡し、自分は(a) 蒲葵の葉を神座（シキダムトウ）にして正座する。外間根人が手渡す(a) 蒲葵の葉は、(b) ニライカナイの神々がニライカナイに戻る時に乗る神々の船を象徴しており、この神々の船を外間根人が仕立てることを意味しているという。外間根人を正面に据え、神格の順に二列縦隊になった神女たち（外間側の神女と久高側の神女）が隣同上で(a) 蒲葵の葉を持って揺らしながら、太鼓役（外間ノ口の掟神・御前居とも）の打つ太鼓に合わせて前述の「フバワクのテイルル」をうたう。太鼓役の発する「はい」という掛け声によって全員が廻れ右をし、またうたい続ける。この廻れ右の演出も、(b) 神々の乗る船が航路を大きく外して難儀していることを示している（図2）。

この祭りの船漕ぎ儀礼に外間根人が参列するのは、このカンジャナ山だけである。

カンジャナ山でうたわれる「フバワクのテイルル」のBの御嶽名と神名は、次のようになっている。

- (カンジャナヌ) (カンジャナ山の)
- (カンジャナシー) (神加那志)
- (ウブンシミヌ) (大西銘の)
- (フパウツチュ) (蒲葵掟を)

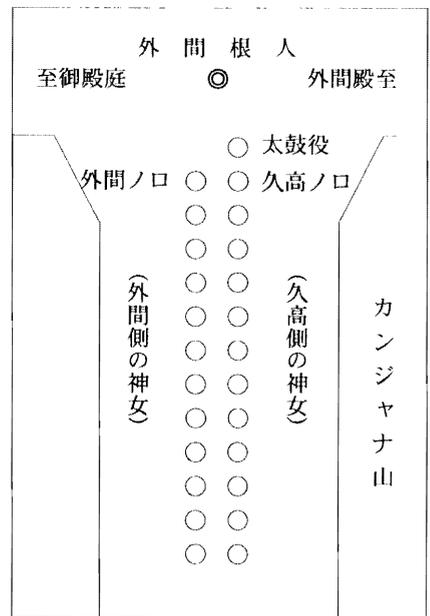


図2 カンジャナ山での船漕ぎ儀礼の図

「大西銘」は古い元屋の一つで、この御嶽の神木・(a) 蒲葵を神名とした「蒲葵掟」が出ていた。「蒲葵掟」は別名を「大西銘の根人」ともい、男の神人だったという。この神人が一九二〇年頃に白い神衣裳を着て祭りに列席していたという。久高根人は現在不在だが、不幸な亡くなり方をした先代の久高根人はこの「蒲葵掟」に就くべきだったともいわれている。

クンプチ山での船漕ぎ儀礼 次いで、神女たちはクンプチ山に移動し、カンジャナ山の儀礼と同様、準備してあった(a) 蒲葵の葉を互いに手にし、「フバワクのテイルル」をうたいながら神遊びをし、太鼓役の発する「はい」という掛け声によって全員が廻れ右をする。太鼓を打つのは、御嶽が村落内にあるカンジャナ山とクンプチ山だけである。

クンプチ山でうたわれる「フバワクのテイルル」のBの御嶽名と神名は、次のようになっている。

- (クンプチヌ) (クンプチ山の)

○(カバシャウツチュ) (芳しい掟神を)

「カバシャウツチュ」
 「芳掟」は女神で、その名のとおり美人だったという。クンプチはミカンの一種で、沖繩本島ではカーブチ(皮厚が語義)という。比嘉(一九九三a、四六八頁)によると、クンプチ山が祭りで拜まれるのはこの時だけだという。

ウブンディ山での船漕ぎ儀礼 それからウブンディ山に行き、今までの儀礼と同様、準備してあった(a)蒲葵の葉を互いに手にして「フバワクのテイルル」をうたいながら神遊びをする。この時は廻れ右をしないで、東方を向いたままである。これは、(b)神々の乗る船がニライカナイに直進して無事に到着したことを示しているという。

ウブンディ山でうたわれる「フバワクのテイルル」のBの御嶽名は、次のとおりである。

○(ウブンディヌ) (ウブンディ山の)

○(ミリリチュ) (水り人を)

「水り人」は雨乞いの女神である。一九四二年のイザイホーで「水り人」の神名を授けられたナンチュたちは、桶に水を満たして持ち、また他の神女たちから水をかけられていたという。

神送り 以上、二日目の三つの船漕ぎ儀礼は(b)神送りである。

そこで幻視されている世界は、次のとおりである。外間根人が神女に(a)蒲葵の葉すなわち(b)神々の船の象徴を手渡すのは、外間根人が(b)戻り船を仕立てていることを表している。そして、(b)ニライカナイの神々はこの(a)蒲葵の葉すなわち(b)戻り船に乗って、カンジャナ山から東方へと向かい、途中で何度も大きく航路を外して難儀しながらニライカナイに到着している。

以上、この神送りの船漕ぎの所作だけで表現され、そこでうたわれる「フバワクのテイルル」の主題と直接関わっていない。

また、(3)現行のフバワク(イザイホー小)における船漕ぎ儀礼は島とニライカナイだけを意識しているともわかる。

イザイホーの船漕ぎ儀礼との比較 以上、(3)現行のフバワク(イザイホー小)の一日目と二日目の船漕ぎ儀礼は、(b)ニライカナイの神の神迎えと神送りである。この点、(4)イザイホーにおける(b)ニライカナイの神の神迎えと神送り、とくに三日目の船漕ぎ儀礼・綱の神送りとの比較が求められよう。

神迎え (3)現行のフバワク(イザイホー小)と(4)イザイホーにおいて(b)ニライカナイの神々が船に乗って島に来訪しているのは、(d)王府の神の島の一般神女組織への加入、昇任、引退を認証するためもある、と考えられる。

(3)現行のフバワク(イザイホー小)では(b)ニライカナイの神々の来訪が、アグル嶽における船漕ぎの所作で表現されている。これに対して、(4)イザイホーでは(b)ニライカナイの神々の来訪が、「柄杓取りのテイルル」と「綱のテイルル」で船に乗って来ると表現されている。

神送り また、(3)現行のフバワク(イザイホー小)における(b)ニライカナイの神々の戻りは、カンジャナ山・クンプチ山・ウブンディ山での船漕ぎの所作で表現されている。この時の(b)戻り船は各御嶽の(a)蒲葵の葉であり、その船を仕立てるのは外間根人である。これに対して、(4)イザイホーにおける(b)ニライカナイの神々の戻りは、御殿庭における綱の船漕ぎの所作と東方のカンジャナ山に綱を収める所作で表現されている。その一方で、「柄杓取りのテイルル」と「綱のテイルル」で(b)神々が船で首里の聞得大君の御殿に至ると表現されている。この時の戻り船は綱(稲藁)であり、その船を仕立てるのは外間根人で、カンジャナ山で綱(船)を作っている。

ニライカナイへの基地 以上、この二つの祭りにおいて戻り船の仕

立て、出立、到着が、カンジャナ山を舞台にしている。この山の名が「カンジャナ山」であり、その神名が「カンジャナシー（神加那志すなわち神様の義）ウブンシミ（大西銘という元屋の名）の蒲葵スバツギ掟」とあるから、この御嶽は（a）蒲葵を神木とし、大西銘から出た神人がこの御嶽を管理し、ここがニライカナイの神加那志と深い縁を持つている、と考えられる。これらから、カンジャナ山がニライカナイに通じる基地だとわかる。

ニライカナイ・久高島・首里王府 このように、(3)現行のフバワク（イザイホー小）と(4)イザイホーにおける（b）神々の船のあり方は、基本的には島と東方のニライカナイを去来し、戻り船を外間根人がカンジャナ山で仕立てている。そして、(4)イザイホーでは（b）神々の船が西方の首里王府にも至って、複雑化している。

祭りの古層と新層 この(3)現行のフバワク（イザイホー小）と(4)イザイホーにおける（b）ニライカナイの神々の去来の方の重複と違いは、(3)現行のフバワク（イザイホー小）と(4)イザイホーが同一性格を持ち、(3)現行のフバワク（イザイホー小）が古層の祭りで、(4)イザイホーが新層の祭りであることを示すとともに、この二つの祭りが(2)「かつてのフバワク」を母胎・祖型にして誕生したことを示唆しているよう。

御嶽の再編 (3)現行のフバワク（イザイホー小）の船漕ぎ儀礼の執り行われる御嶽は、アグル嶽、カンジャナ山、クンプチ山、ウブンディ山である。これらの御嶽のうち、いわゆる七御嶽（実際は九御嶽）に数えられているのが、アグル嶽、カンジャナ山、ウブンディ山であり、クンプチ山だけが除外されている。

高良勉氏は、この事実を御嶽の再編で理解したらどうか、と示唆してくれた。すなわち、かつてクンプチ山も島の主要な御嶽として数えられた時代があり、この時代に(2)「かつてのフバワク」が執り行われ

ていた、と想定できる。しかし、この後に御嶽の再編があつてクンプチ山が七御嶽から除外されたものの、(3)現行のフバワク（イザイホー小）は既に形成されたクンプチ山での船漕ぎ儀礼を尊重して温存し、クンプチ山を祭場にする儀礼を今に伝えている、とみるのである。

この(2)「かつてのフバワク」あるいは(3)現行のフバワク（イザイホー小）に対して、(4)イザイホーでは七御嶽を嶽廻りして御願立てをしているものの、この七御嶽のなかにクンプチ山が入っていない。

この点からも、(2)「かつてのフバワク」あるいは(3)現行のフバワク（イザイホー小）が古層の祭り、(4)イザイホーが新層の祭りだとわかる。

蒲葵御嶽での祈願 ウブンディ山の儀礼が終わると、神女たちは改めて蒲葵御嶽で（a）蒲葵の葉の神座（シキダムトウ）に座って拝む。

その後、村落に帰って帰宅する。

一〇 スクの大漁祈願

スクの大漁祈願 二日目の昼、ノロ以下のタマガエー（タムトウ・ウンサク・ヤジク）が紺地に着替えて御殿庭（久高殿）に参集する。ここでも、神女たちと男神人たちは（a）蒲葵の葉の神座（シキダムトウ）に座る。そして、（a）蒲葵の葉の容器に野菜とスクガラスを盛り付け、神酒を供える。このスクガラスは、ソールイが六月にスク漁をしてこの日のために塩漬けしておいたものである。そして、女の国神（六名）が寄り物の（f）スクの大漁祈願をする。それから、ノロ以下の高級神人に料理（塩サバ）が供される。

来訪神とともに寄つて来るスク 以上、カンジャナシーと同様、（b）ニライカナイの神々が島に来訪する時に、ニライカナイからの

寄り物（スクやエラブウナギ）が神々の後に付いて寄って来るので、カンジヤナシーではエラブウナギの大漁祈願がなされ、(3) 現行のフバワク（イザイホー小）では（f）スクの大漁祈願がなされている、と考えられる。こうしてみると、ニライカナイの神々が島に来訪するのは、（f）大漁をもたらすためでもある、といえる。

以上で、(3) 現行のフバワク（イザイホー小）は終了する。

一一 結び

まとめ 以上、まず、(3) 現行のフバワク（イザイホー小とも）の次第（儀礼）とそこでうたわれる神歌（テイルル）を記述し、その祭祀世界が次の諸要素・主題を持つことを明らかにした。すなわち、（a）嶽廻り（御嶽巡拝）をして御嶽の蒲葵などを掃除し、蒲葵の葉を重用し、（b）ニライカナイの神々が船に乗って来訪し、（c）年末に一年間の祈願の結び（立て御願が叶えられたという感謝、御願解き）をし、（d）首里王府の神の島の一般神女組織を再編し、（e）神歌が首里王府を志向し、（f）スクの大漁祈願をしている。

次いで、(3) 現行のフバワク（イザイホー小）以前に(2) 「かつてのフバワク」があり、それが右の諸要素・主題の他に、（d）にさらに首里王府の最高神女・聞得大君に仕えるナンチュの成巫式（イザイホーの前身）もあつたことを述べた。そして、この(2) 「かつてのフバワク」を母胎・祖型にして、(4) イザイホーと(3) 現行のフバワク（イザイホー小）が誕生したことを明らかにした。

〔引用文献・参考文献〕

- 入間田宣夫・豊見山和行 二〇〇二 『北の平泉、南の琉球』（中央公論新社）
- 島山 篤 二〇〇五a 「久高島のフバワクの祭祀世界」
- 『野村純一先生退職記念論文集』（岩田書院）
- 比嘉 康雄 一九九三a 『神々の原郷 久高島上巻』（第一書房）